

モード
流行の発信と〈文学〉
松屋呉服店刊『今様』の文芸欄

Creation of Fashion Trends and Literature:
Literary Columns in *Imayou* issued by Matsuya Gofukuten

瀬崎圭二

SEZAKI Keiji

はじめに

①『今様』の所在と書誌

②『今様』文芸欄の執筆者

③今様会

④文芸欄の小説群

⑤鏡花・雨雀・万太郎

おわりに

【論文要旨】

明治 30 年代は、デパートメントストア化を進める呉服店が一様にその機関雑誌を刊行し始めた時期である。呉服店／百貨店の機関雑誌は、近代的な流行、すなわち流行^{モード}を形成し、その商品を紹介するための媒体であっただけでなく、多くの読み物を提供する文芸誌的な性格も兼ね備えていた。三越や白木屋の機関雑誌にはそうした色彩が色濃く刻まれているが、明治 39〔1906〕年に創刊されたとされる松屋呉服店の『今様』にもそのような要素を認めることができる。現在確認できる範囲の『今様』から推測すると、明治 45〔1912〕年から大正 2〔1913〕年の『今様』誌上にはしばしば文芸欄が設けられていたようだ。三越や白木屋の機関雑誌同様に、その記事の多くは江戸文化に造詣の深い者や、やや古い世代の文人たち、当時活躍していた知識人たちによって書かれていることが多い。また、その誌面からは、明治 45〔1912〕年に新聞記者や広告代理業者を集めて「今様会」なる組織が結成されていたことも分かる。『今様』に掲載された文学作品は、三越や白木屋の機関雑誌に掲載された作品と同様に、結婚や家庭生活、夫婦生活を取り上げ、その中で消費という行動を描いているものが多いが、三越や白木屋のそれと大きな差異を孕む作品も見られる。泉鏡花「橋むかふ」、秋田雨雀「浴場の午後」「短き夢」、久保田万太郎「小てるとつる代」がそれだ。『今様』に掲載された他の作品に比して、これらはいずれもその物語の目的が不明瞭であると同時に、それに呼応した独特な表現性を発揮しているのである。とりわけ、呉服店／百貨店の機関雑誌に掲載された文学作品は古い世代の書き手によるものが多い中で、雨雀や万太郎といった新人たちが『今様』に作品を寄せていることは特筆に値しよう。そのような点にこそ『今様』という雑誌の意義があるのだ。

【キーワード】江戸趣味、泉鏡花、秋田雨雀、久保田万太郎

はじめに

明治を迎え、西洋のデパートメントストアの手法を取り入れ始めた三越、白木屋などの呉服店は、明治30年代にその商品の宣伝や通信販売のための雑誌を刊行し始める。例えば三越は、その前身三井呉服店時代の『花ごろも』[明治32〔1899〕年刊行]を皮切りに、明治36〔1903〕年8月からは月刊誌として『時好』を、その廃刊後には『みつこし(三越)タイムス』、明治44(1911)年3月からは『三越』を刊行した。白木屋は、明治37〔1904〕年7月から同じく月刊誌の『家庭のしるべ』を、その廃刊後には『流行』を刊行している。こうした雑誌の刊行は、当時の多くの呉服店が流行の近代化、つまり流行^{モード}の創出を企図して行っていたことであり、その総体については、既に土屋礼子が詳細に調査している⁽¹⁾。

土屋が「機関雑誌」と呼ぶこれらの雑誌の刊行は、昭和期に戦争によって一時中断し、戦後、一部で復活していくことになるのだが、特に明治から大正期にかけてのそれは、単に流行^{モード}の形成や商品の宣伝、その通信販売のためのものであっただけでなく、数多くの関連記事や読み物も掲載していた。例えば、三越(三井)の機関雑誌の場合、尾崎紅葉や紅葉率いる硯友社周辺の文人たち、饗庭篁村や幸田露伴など江戸文化に通じた文人たち、あるいは、森鷗外や与謝野晶子など、当時の文人、知識人たちの記述が誌面に寄せられている。そこには、詩、短歌、小説、戯曲などの創作も多くあったことから分かるように、明治、大正期の三越(三井)の機関雑誌は文芸誌としての側面も持っていた。三越のそれに比すればやや見劣りするかもしれないが、同時期の白木屋の機関雑誌にも同様の傾向が見られる。

これら呉服店／百貨店の機関雑誌における〈文学〉の役割については、既に拙著『流行と虚栄の生成 消費文化を映す日本近代文学』[世界思想社、2008年]で分析した通りだ。拙著では、明治、大正期の三越、白木屋の機関雑誌に掲載された文学作品を対象に、流行^{モード}の形成や〈ブランド〉の形成、消費者としての女性の形成と〈文学〉の表象との関わりについて考察したが、それは、分析対象とした三越、白木屋の機関雑誌が、文芸誌としての側面も持っていたことに併せ、その大部分が調査しやすい形で保存されていたからでもある。いずれも、国会図書館やいくつかの大学図書館を利用すれば、容易に閲覧することが可能なのである。

しかし、文芸関連記事を掲載していることが推測されるにもかかわらず、散逸しやすい機関雑誌の性質故に、その全貌が未だ見渡せていないものが存在する。それが、松屋呉服店が刊行していた『今様』だ。かつて、拙稿「百貨店のメディア／メディアの百貨店」[『衍書月刊』2002年3月]において指摘したことがあるように、現存する明治末期から大正初期にかけての『今様』には「松屋文芸」などの文芸欄が設けられ、そこには著名な文人、知識人が筆を寄せていたことが確認できている。そうした文芸誌としての価値を備えている可能性は見えるものの、現在の株式会社松屋でさえ『今様』を全て保存しているわけではない。

今回の国立歴史民俗博物館の共同研究「歴史表象の形成と消費文化」では、長野県須坂市にある旧家田中本家の所蔵品を合同で調査する機会に恵まれたが、その田中本家こそが、呉服店／百貨店の機関雑誌を通じて商品を購入していた顧客であった。近世期に商家として成功を収め、大地主に

成長した当家には、三越や白木屋などが刊行していた機関雑誌が保存されており、その中には松屋の『今様』も含まれている。今回の調査では、田中本家所蔵品の中に未見の『今様』を発見することはできなかったが、この共同研究と合同調査を機に、松屋の『今様』及びその掲載記事について不完全ながら報告しておくことにしたい。さらに、その誌面内容から抽出される表象の力学を、三越や白木屋のそれと比較して考察することも本稿の目的である。

①……………『今様』の所在と書誌

明治、大正期に『今様』を刊行していた松屋は、明治2〔1869〕年に初代古屋徳兵衛が横浜に開業した鶴屋呉服店に端を発する。横浜で成功を収めた鶴屋は、近世期から営業していた東京神田今川橋の松屋呉服店を明治22〔1889〕年に買収し、東京進出を果たすことになる。以後、横浜亀の橋の鶴屋と東京今川橋の松屋として営業し、他の呉服店と同様、デパートメントストア化を進め、今川橋松屋は、明治40〔1907〕年に洋風三階建てに店舗を改造した。こうした動きを見せ始めた明治39〔1906〕年に、⁽²⁾『今様』は創刊されたのである。

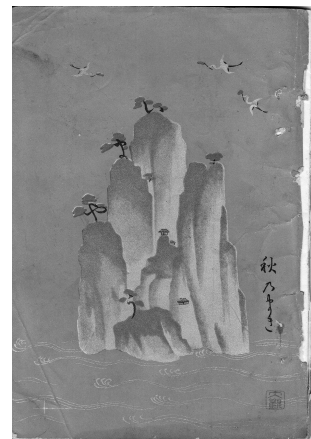
2013年7月の調査段階で確認できている『今様』の巻号と所蔵先は表の通りで、株式会社松屋に保存されている23冊、田中本家所蔵の15冊、同じく東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター内明治新聞雑誌文庫の15冊、国立国会図書館の4冊、古書店を通じて収集した私蔵の28冊を確認した。判型は、明治39〔1906〕年9月に発行された「秋の巻」のみ四六判、他は全て菊判で、雑誌の価格について記載はない。おそらく無料で顧客に配布されていたのだろう。

発行者は内藤彦一が長く務めているが、大正9〔1920〕年5月号の奥付には編輯者古谷延貞、発行者山本龍造とあるので、この時期に交代があったのだろう。社史『松屋百年史』〔株式会社松屋、1969年〕

によれば、明治29〔1896〕年から今川橋松屋の支配人を務めていた内藤彦一は、大正8〔1919〕年3月に株式会社松屋鶴屋呉服店の取締役就任し、山本龍造は大正9〔1920〕年2月に支配人心得に就任しているため、この時期の異動が関係しているものと推測される。

商品の通信販売のための雑誌である『今様』は、三越や白木屋の機関雑誌と同様に、商品の写真がその説明や価格と共に紹介される頁が多くを占めている。読み物などの記事が掲載されることもあるが、記事の頁が最も充実しているのは明治45〔1912〕年から大正2〔1913〕年の2年間で、以後は次第に減少し、ほとんど商品紹介頁のみで構成されるようになる。前にも述べた「松屋文芸」などの文芸欄は、その2年間に設けられたものだ。

また、表に見られるように、大正14〔1925〕年5月に夏裾模様之巻、9月に秋裾模様之巻が刊行されていることが確認できるが、この2冊はそれまでの『今様』とは大きく体裁を変えており、和装の装丁で裾模様を掲載しただけの冊子となっている。夏裾模様之巻の奥付には、編輯者松屋呉服店図案部、発行兼印刷者本田市次郎、発売所は芸艸堂とあり、秋裾模様之巻の奥付も、編輯者が松



『今様』秋の巻 表紙
(明治39年9月28日刊)

表 松屋呉服店『今様』の所蔵先

刊行年月日	松屋	田中	東大	国会	私蔵
明治39年9月28日(秋の巻)	○				○
明治40年4月1日(第貳年貳号 春の巻)	○		○		○
明治40年10月25日(秋の巻)	○		○		
明治40年12月30日(冬の巻)	○		○		
明治41年3月25日(春の巻)	○				
明治41年6月1日(夏の巻)	○				
明治42年4月1日(春の巻)					○
明治42年6月15日(夏の巻)	○				
明治42年10月22日(秋の巻)	○		○		
明治42年12月31日(冬の巻)	○		○		○
明治43年5月15日(夏衣の巻)	○				○
明治43年10月5日(冬衣の巻)		○			○
明治44年1月1日(新年の巻)	○	○			○
明治44年5月8日(夏衣の巻)	○	○			○
明治44年8月10日(葉月の巻)		○			○
明治44年10月5日(冬衣の巻)		○	○		○
明治45年1月1日(新年の巻)		○	○	○	○
明治45年5月1日(夏衣の巻)	○	○	○		
明治45年6月13日(六月号)					○
明治45年7月1日(七月号)	○				
明治45年8月1日(八月号)		○	○		○
大正元年10月1日(冬衣の巻)	○		○		○
大正元年10月31日(十一月号)	○	○			○
大正2年1月1日(第八年新年号)		○	○	○	
大正2年5月1日(五月号)		○	○		○
大正2年6月1日(六月号)		○			○
大正2年10月1日(十月号)	○				○
大正2年11月1日(十一月号)		○			○
大正2年12月1日(十二月号)		○	○		○
大正3年4月1日(大正博覧会記念号)		○			
大正3年5月1日(五月号)	○				○
大正3年7月1日(七月号)	○				
大正3年10月18日(十月)	○		○		○
大正4年5月1日(夏衣の巻)	○				
大正4年10月5日(冬衣の巻)	○				○
大正5年5月24日(六月号)					○
大正6年4月30日(五月号)					○
大正6年10月1日(十月号)					○
大正7年1月? (※奥付なし 一月号)					○
大正7年5月1日(五月号)	○				
大正8年10月1日(十月号)			○		
大正9年5月1日(五月号)					○
大正14年5月15日(大正十四年夏裾模様之巻)				○	
大正14年9月15日(大正十四年秋裾模様之巻)				○	

松屋＝株式会社松屋 田中＝田中本家 東大＝東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター内
明治新聞雑誌文庫 国会＝国立国会図書館 私蔵＝筆者私蔵
○＝所蔵

屋呉服店意匠部となっている他は夏裾模様之巻と同じである。この2冊はそれまでの『今様』と装丁、判型、内容の点において大きく異なるため、別種のもものと判断しても良いかもしれない。

これは、大正12〔1923〕年9月1日の関東大震災を境に松屋が大きな変化を迎えたこととも関係していよう。亀の橋鶴屋、今川橋松屋は震災で店舗を焼失し、翌年、鶴屋は吉田橋に、翌々年、松屋は銀座に店舗を新築すると共に、大正13〔1924〕年には株式会社松屋鶴屋呉服店から「鶴屋」を削り、株式会社松屋呉服店と商号を改めてもいる。こうした変化が、震災後の大正14〔1925〕年に刊行された『今様』にも及んでいるものと推測される。なお、土屋礼子の調査によれば、大正15〔1926〕年から、『今様』に代わって『松屋グラフ』という機関雑誌が、通信販売のための雑誌として、少なくとも昭和11〔1936〕年まで刊行されていたことが確認されているが、『松屋グラフ』に掲載された文芸記事については、現段階では全く調査が及んでいない。

さて、前述の通り、本稿で重視しているのは、誌面に「松屋文芸」などの文芸欄が設けられた明治45〔1912〕年から大正2〔1913〕年にかけての『今様』だ。その内現段階で確認できたのは13冊で、以下はその中でも特に文芸欄が充実している7冊の記事一覧である。

【夏衣の巻 明治45〔1912〕年5月1日発行】

表紙 尾竹国観「雷鳴」

口絵 鍋木清方「五月雨」

岡倉覚三夫人談「衣服の色」

小川一真「写真と服装の関係」

村田紫郊「婦人旅行服の所感」

飯島可年子談「婦人界の紹介手続」

樋口二葉「矢の根人形」

太田杏村「端午の節句」

【七月号 明治45〔1912〕年7月1日発行】

東洋大学・女子大学教授 高島平三郎「家庭の趣味」

【八月号 明治45〔1912〕年8月1日発行】

表紙 尾竹竹坡「滝」

口絵 中沢弘光「京の女」

東洋大学・女子大学教授 高島平三郎「家庭の趣味」

女子高等師範学校教授 文学士 下田次郎「趣味ある衣服」

鍋木清方「画家の見た夏衣裳」

東京高等女学校校長 棚橋絢子「夏ごろも 附中形の用ひ方、贈物の選択法」

文学博士 建部遯吾「涼しかつた欧州の夏」

井手小ゆり「胡蝶花」

跡見高等女学校校長 跡見花蹊「紀州の涼遊」

井手小ゆり「牽牛記」

近藤蕉雨「温泉と海水浴」

思案外史（石橋思案）「夏の価値」

日本女子商業学校学監 嘉悦孝子「婦女子の避暑旅行に就て」

井手小ゆり「荷花」

泉鏡花「橋むかふ」

東京朝日新聞記者 松崎天民「或る女へ」

井手小ゆり「百日紅」

文学士 内海月杖「からなでしこ」

文学博士 佐々木信綱「海の緑」

内藤鳴雪「清水十句」

柳川春葉「宵暗」

秋田雨雀「浴場の午後」

井手小ゆり「豆の花」

半井桃水「祝賀会」

樋口二葉「博多織の祖及中興の祖（一）」

太田杏村「維新前の貧民騒動」

柳家小さん口演 今村次郎速記「涼み船」

【第八年新年号 大正2〔1913〕年1月1日発行】

表紙 矢沢弦月「春」

口絵 鎬木清方「若き夫人」、田村彩天「若き日」

文学博士 遠藤隆吉「心の技術」

三輪田高等女学校校長 三輪田元道「新年に感じた社交と情誼」

跡見高等女学校校長 跡見花蹊「様々の春景色」

貴族院議員 子爵 前田利定「忘れぬ新年の旅行」

文学博士 幸田露伴「女と力」

鳩山春子「新年に際して」

女子高等師範学校教授 下田次郎「美と生活」

松屋呉服店庶務部長 山本龍造「婦人と職業」

杏村生（太田杏村）「七福神の説」

近藤蕉雨「紋章瑣談」

文学博士 佐佐木信綱「春の宵」

井手ゆり子「雪さん」

今様編集部 細田孤眠「懸賞募集に就きて」

広津柳浪「羽織のお金」

半井桃水「奇縁」

饗庭篁村「心の錦」

黒田湖山「滑稽大島紬」

秋田雨雀「短き夢」

【五月号 大正2〔1913〕年5月1日発行】

口絵 中沢弘光「河ばた」
久保田万太郎「小説 小てるとつる代」
太田杏村「江戸時代の研究」
杏村（太田杏村）「あやめの節句」
沢村宗之助談「私の好きな着物」

【六月号 大正2〔1913〕年6月1日発行】

山田敬中 鎗木清方談「夏の女風俗」
太田杏村「幕末の流行と續の起源」

【十月号 大正2〔1913〕年10月1日発行】

口絵 中沢弘光「まひこ」
東京美術学校長 正木直彦談「流行瑣談」
渡辺水巴談「雑感」
新橋 花月女将談「衣服の着方など」

ここでは、「松屋文芸」や「文芸」という形で括られたものや、他の記事とは明確に区別される形で掲載された文芸関連記事を取り上げたが、他の巻号にも、小説や落語などの読み物は散見される。例えば、明治40〔1907〕年10月発行の「秋の巻」には、永島永洲の「小春日和」という小説が、明治45〔1912〕年1月発行の「新年の巻」には、福田琴月の「新春落語 松づくし」や、西村渚山の誤記と推測される西村清山の小説「餅」が掲載されている。まずは『今様』に集ったこれらの執筆者たちの経歴とその関係性を解きほぐしておく必要があるだろう。

②……………『今様』 文芸欄の執筆者

『今様』創刊翌年の「秋の巻」〔明治40〔1907〕年10月〕に今川橋松屋が洋風3階建てに店舗を改築したことについて祝辞を寄せ、前掲の文芸関連記事にも頻繁に登場する太田杏村は、おそらく松屋そのものに深くかかわっていた人物であろう。太田杏村は本名を太田賛雄^{（4）}といい、本人の言によると、元水戸藩士で明治24〔1891〕年に朝野新聞社に入社したという。母親が大奥に仕えていたという杏村は、永島今四郎と共に『朝野新聞』紙上に連載していた記事を『千代田城大奥』〔朝野新聞社、明治25〔1892〕年〕として刊行したことで、今日その名を残している。この杏村の盟友永島今四郎^{（5）}の号が永洲であり、前述の「秋の巻」に、杏村は今川橋松屋改築の祝辞を寄せ、永洲は小説「小春日和」を寄せているということになる。

江戸文化に詳しかった杏村は『風俗画報』にもそれに関連した記事を度々寄せているが、『今様』に限らず、呉服店／百貨店やその機関雑誌は江戸文化に通じた文人たちとの関係が深い。例えば、三越が仕掛けた元禄模様の流行に呼応する形で明治38〔1905〕年7月に開催された第1回元禄研究会^{（6）}は、旧幕臣の戸川残花が主導するものであったし、幕府に通弁として仕え、維新後新聞記者として活躍していた福地桜痴や、角田竹冷を中心とする秋声会の面々もそこに参加していた。同年6月

には、三越による^{モード}流行の創出をサポートするべく文人、知識人が集められた流行研究会（流行会）が結成されていたが、その流行会から大正元〔1912〕年に派生した、幸田露伴、佐々醒雪、邨田丹陵、塚原洪柿園、中内蝶二、井上剣花坊、斎藤隆三、久保田米斎、饗庭篁村、伊原青々園を会員とする江戸趣味研究会は、そうした文人たちと呉服店／百貨店との関係を端的に表すものである。⁽⁸⁾

杏村の視野にはそうした三越の動向が入っていたのだろう。『今様』に掲載された杏村の「江戸時代の研究」に次のような記述が見える。

江戸文明の研究と云ひ江戸趣味の復活と云ふことが、近頃種々の方面に好箇の題目を提供して謳歌せられ、これまで余り江戸文明に注意を払はなかつた人々も、此に非常なる興味を以て迎へられ、江戸趣味は近代文芸に向つて新しい価値を有するものになつた。この機に乗じ三越流行会の諸氏は、江戸趣味の真髓を研究し、これを現代に適用せんと希望にて、専ら事実の探求に尽瘁しつつ在りと云ふ、江戸趣味は遠からず三越流行会より発表され何人の目にも映ずることとなり、時の流行も亦意外の変化を見るであらうと世人は期待して居る。流行会諸氏の研究は、享保より文化文政に亘りて第二期の江戸時代と為し、天明時代を最も主として探求することを吹聴されて居る。

ここで杏村が述べている流行会の動向とは、江戸趣味研究会のそれであろう。三越の機関雑誌『三越』〔大正2〔1913〕年1月〕に掲載された「江戸趣味研究会」という記事には、江戸趣味研究会の結成とそのメンバーが報じられ、「先づ江戸の如何なる時代を目標として研究すべきかに就て討究さるる所あり、享保より文化文政に渉りて第二期江戸時代とするの妥当なる事を決議し、尚其精粹ともいふべき天明時代を最も主として研究する事に決定したり」と、その討議内容が伝えられている。引用は避けたが、杏村はそうした動向を視野に入れつつ、「江戸時代の研究」の中で天明時代の流行を紹介している。この記事の中での杏村は、流行会について好意的な態度を示しており、江戸文化に対する研究的視座や江戸趣味が、三越にリードされつつもそれを越えたところで広く共有されていたことが分かる。

同じく『今様』に名を寄せている樋口二葉も、江戸文化について記述を多く残した人物だ。その筆名から樋口一葉との関係が想像されるが、一葉よりも早く執筆活動に入っていたらしく、その記述の傍らに、「樋口二葉氏を故一葉女史の妹ならんと、新聞に雑誌に云ふもの多かれと、左にあらす、全くのべつ人にして、筆を文壇に執るは一葉女史よりなほ早かりけん」〔樋口ふたば「苔のかをり」『武士道』明治31〔1898〕年4月〕と注意書きが添えられたこともある。本名は久で、二葉の他に、ふたば、新六といった筆名を用い、浮世絵師から記者に転じて『東京絵入新聞』の記者を務めた経歴を持つ。⁽⁹⁾二葉も寄稿した江戸研究会編『趣味研究 大江戸』〔大屋書房、大正2〔1913〕年〕には、佐々醒雪、塚原洪柿園、幸堂得知、饗庭篁村、岡野知十、幸田露伴、伊原青々園、岡本綺堂らが執筆しているが、彼らの名は三越や白木屋の機関雑誌に頻繁に登場し、その多くが三越の流行会や江戸趣味研究会の会員でもある。

そうした研究会との直接的なかわりは見えないが、『今様』にしばしば記事を寄せていた近藤蕉雨も、研究会の会員たちとの接点は多い。蕉雨は、本名を競四郎といい、生粋の江戸っ子で『団団珍聞』の記者を皮切りに多くの新聞、雑誌に関与した人物である。蕉雨が編集した⁽¹⁰⁾『長唄大通』〔法木書店、大正11〔1922〕年〕には中内蝶二が、同じく『社会万般番附大集』〔大日本雄弁会、昭和2

〔1927〕年〕には、巖谷小波、井上剣花坊、岡本綺堂、前田曙山といった三越の流行会の会員が序文を寄せており、蕉雨の人脈がうかがえる。しかし蕉雨の晩年は不遇で、俳人として各地を放浪した末に、最期は生活苦から木曾川に投身自殺したと伝えられている。⁽¹¹⁾『今様』に寄せられた杏村、二葉の記述には、やはり江戸の文化や風俗、歴史を語ったものが多いが、蕉雨のそれは前掲の一覧に挙げたものだけにとどまらず、しかもその内容は多岐にわたっている。

『今様』において、女性やその内面、衣服、流行などについて語った記事が多くを占めているのも他の呉服店／百貨店機関雑誌と同様だ。棚橋絢子、跡見花蹊、嘉悦孝子、鳩山春子、下田次郎、三輪田元道ら女子教育に携わった当時の著名人や、女性やその衣服を写し取る機会の多い写真家の小川一真、日本画家の鏑木清方、山田敬中らの名前が誌面に見えるのは、そのような傾向の反映として捉えることができよう。天心岡倉覚三の夫人の談話など、衣服に対する女性の声を直接伝える形式も見える。当時三越の流行会会員であった高島平三郎や正木直彦の記事も見え、特に明治43〔1910〕年6月の流行会例会で「流行の原理」、10月の例会で「趣味の心理」といった講演を行い、その心理学的見地から流行や趣味の分析を試みていた高島平三郎は、『今様』にも「家庭の趣味」という記事を連載している。⁽¹²⁾

同じく「心の技術」という記事を寄せた遠藤隆吉は当時の社会学者で、高島平三郎同様に、現象としての流行^{モード}を学問的に捉えようとしていた人物の1人である。明治、大正期における流行^{モード}の学術的な分析は、フランスの社会学者ガブリエル・タルド『模倣の法則』〔原著1890年 最初の邦訳は風早八十二訳で大正13〔1924〕年に而立社より刊行〕によるところが大きく、遠藤は、そのタルドの流行論や、タルドに対するエミール・デュルケムの批判を、既に『社会学及研究法』〔同文館、明治36〔1903〕年〕の中で紹介していた。流行への遠藤の関心は高く、心理学通俗講話会編『心理学通俗講話 第三輯』〔同文館、明治44〔1911〕年〕の中には遠藤の「流行の話」が収められ、アメリカの社会学者エドワード・ロスの流行論を翻訳した『ロス社会心理学』〔原著1908年 高部勝太郎訳 磯部甲陽堂、大正6〔1917〕年〕の校閲を務めてもいる。⁽¹³⁾『今様』掲載の「心の技術」は、そうした学問的認識を分かりやすく語り直したものだ。

三越、白木屋の機関雑誌同様に、『今様』にも多くの文学作品が掲載されているが、これらの書き手も概して重複している。呉服店／百貨店の機関雑誌が刊行されていた明治末期から大正初期を、一般的な文学史は自然主義とその対立項の図式として整理し、明治末期にパンの会に集った人物たちの作風に江戸情緒に対するロマンティズムを読み取ったりもするが、三越、白木屋、松屋の機関雑誌に掲載された膨大な文学作品は、概して、そうした文学史が周縁化する書き手によるものだ。『今様』においても、明治36〔1903〕年に尾崎紅葉をその死によって失った、石橋思案、泉鏡花、柳川春葉、広津柳浪といった硯友社の作家たちや、饗庭篁村、半井桃水など、旧世代の書き手が目立つ。三越の機関雑誌にも創作を寄せているこれらの書き手は、確かに文壇の前衛ではなかったが、実績のあるベテランとして位置づけられはする。言い換えれば、呉服店／百貨店の機関雑誌は、そのような位置の書き手に価値を置いたということであろう。

ちなみに、機関雑誌を通じて何度か懸賞文芸作品の募集を行った三越を模倣するよう⁽¹⁴⁾に、松屋も懸賞募集を行っている。細田孤眠「懸賞募集に就きて」に「此度当店発行の雑誌『今様』の特別号発刊に就き懸賞文芸欄を設け普ねく全国の女学校より、小品文、和歌、絵画の三種を募集すること

に印刷物を配布して、学校掲示場へ掲示を請ひ、生徒諸嬢の投稿を募りし」と記されているように、その懸賞は「特別号」である第八年新年号〔大正2〔1913〕年1月〕の誌面を充実させるために女学校から募ったものであったようだ。同記事によれば、小品文117篇、和歌241種、絵画46題の応募があり、なぜか関西からの応募が最も多く、関東がそれに次ぎ、東北や北海道からの応募は最も少なかったという。当選作は同号に掲載され、専門家に委嘱してその選定を行ったというが、選者は明らかではない。三越の懸賞はその宣伝に重点が置かれているが、松屋の懸賞にはそのような性格はあまり認められず、三越のそれに比すれば規模もはるかに小さい。

③……………今様会

三越に入社後、機関雑誌『時好』の編集を任された浜田四郎は、衣服や調度品に詳しいという理由から、黒田撫泉、半井桃水、横山健堂、塚塚麗水、石橋思案、永井鳳仙、岡鬼太郎、伊坂梅雪、井上剣花坊、篠田敏造といった各新聞の劇評記者に協力を得て記事を集め、そこから流行会が生まれたことを回想しているが、松屋にも今様会という組織が存在する。今様会の第1回会合は、明治45〔1912〕年6月25日に浜町岡田楼で開催され、以後、月1回のペースで会合がもたれた。会員はやはり各新聞社から集められており、明治45〔1912〕年8月発行の『今様』でその顔ぶれを確認することができる。同誌に「或る女へ」という記事を寄せている東京朝日新聞の松崎天民もその1人であった。⁽¹⁷⁾

『今様』に記事を寄せた頃の天民松崎市郎は、大阪新報、大阪朝日、国民新聞を経て、東京朝日の記者を務めていた。天民が探訪記者として活躍し、『東京の女』〔隆文館、明治43〔1910〕年〕や『淪落の女』〔磯部甲陽堂、大正元〔1912〕年〕を刊行していた頃のことである。「或る女へ」の前書きには、「雑誌「今様」に、何か書けと云内藤大人からの御手紙、(中略)即ち知合の「或る女へ」宛た手紙の体にして思ひ出づる儘を走り書き」とあるため、「或る女へ」は松屋の支配人内藤彦一からの原稿依頼であったようだ。この記述は、地方で教師をしている女性に東京の風俗や流行を語る手紙形式の文章であり、女性のもとを訪れてその談話を記事としていた天民に特徴的な記述となっている。同じ誌面上には今様会の模様を紹介した記事も見られ、天民が酒席で浪花節を披露したことが記されてもいる。

前述したように、三越の流行会は、各新聞の劇評記者や、やや古い世代の文人、文化人、既に一定の評価を得ていた各界の著名人によって構成されていた。一方、「真面目に真面目な『今の様』を研究！工夫する」ことを目的とした今様会の会員は、天民を始めとした新聞記者たちと広告代理業者によって構成されている。以下が、『今様』〔明治45〔1912〕年8月〕誌上に紹介された今様会の会員たちである。

二六新聞社 安藤亮

日本新聞社 児玉蘭綾 富永良太郎

報知新聞社 細谷丈夫 松原主文（松原至文？）

東京日日新聞社 松内則信 小倉弥太郎

東京毎日新聞社 宗像秀蔵
東京朝日新聞社 松崎天民 梅沢安次郎
中外商業新報社 酒田啓二郎 山上鶯郎
中央新聞社 田村三治 岩尾英甫 森実易
読売新聞社 井出群治
やまと新聞社 小川樫村（小川煙村？） 富塚惇
万朝報社 中内蝶二 川野圭司
国民新聞社 気賀義次 尾間明
都新聞社 伊原青々園 吉田克己
時事新報社 竹内麟也 当舎季吉
帝国通信社 細井直次
電報通信社 光永真三
弘報堂 河村偵
正路喜社 浅田源一
松屋呉服店

『今様』誌上には誤字が散見されるのだが、報知新聞社の「松原主文」は松原至文⁽¹⁸⁾、やまと新聞社の「小川樫村」は、小川煙村の誤記であると判断される。煙村は三越の『時好』にも衣服関連の記事を執筆しており、田村三治（江東）、中内蝶二、伊原青々園は当初から三越の流行会に参加し、中内と青々園は江戸趣味研究会にも名を連ねていた。そうした重複は見えるものの、三越が旧世代の文人や各界の著名人を集め、その権威や学問的な知識を重視したのに対し、松屋の今様会は、宣伝を重視した会員構成となっていたようだ。それはそれぞれの記者の経歴を見ればなお分かりやすい⁽¹⁹⁾。

例えば、今様会発足当時、日本新聞社の記者だった富永良太郎は、後に広告代理業告天社を創業、報知新聞社の細谷丈夫は、後に報知営業局相談役兼広告部長に就任、同じく東京日日の小倉弥太郎も広告部長に就任している。宗像秀蔵は、東京広告社、報知新聞大阪支局、東京毎日新聞、帝国通信社を経て旭通信を経営したと伝えられており、この間、専ら広告部主任として勤務していたという。東京朝日の梅沢安次郎も、後、取締役広告部長に就任する。こうした彼らの経歴を見ると、今様会が発足した明治 45〔1912〕年当時においても、その配属は各新聞社の広告関係部署であったことが推測され、そうした記者たちを集めて組織されたのが今様会であったことが分かる。宣伝に重点を置いたその性質は、当時の広告代理業者である帝国通信社、電報通信社、弘報堂、正路喜社で重責を担っていた人物が会員に名を連ねていることにも表れている⁽²⁰⁾。

他の新聞記者も、各社の敏腕であつたらしく、東京日日の松内則信は当時社会部長を務めており、後、大阪毎日の営業局長、東京日日の編輯局総務、取締役⁽²¹⁾に就任、中外商業新報の山上鶯郎は、『労働月報』の主筆を務めていた人物である。中央新聞社の岩尾英甫は、後に九州に赴き、蓬萊生命社九州支部長、福岡銀行第二部支配人、福岡貯蓄銀行支配人に就任、九州で実業家として活躍する⁽²³⁾。森実易も、後、中央新聞業務執行社員理事に、国民新聞社の尾間明は徳富蘆花の姪婿に当たり、後、営業局長に就任する⁽²⁵⁾。

今様会に参加していた小川煙村、田村三治、中内蝶二、伊原青々園は文人肌の記者として名を知られるが、松原至文（致遠）も明治末期から文芸批評を著し、『明治文豪伝之内 尾崎紅葉』〔文禄堂、明治40〔1907〕〕の著者としてその名を残している。ただし、松原至文は、明治初年代に生まれた小川煙村、田村三治、中内蝶二、伊原青々園よりやや若く、彼らとは世代を違えている。

他の呉服店／百貨店同様、こうした文人肌の人物も今様にかかわってはいるのだが、前述したように、今様会の特徴は各新聞社の広告関係部署の記者や広告代理業者が多くを占めている点にある。『真面目に真面目な『今様の研究！工夫する』会であることを銘打った今様会ではあるが、三越の流行会のように、流行創出や商品開発に間接的に連なるような研究会や講演会、展覧会などを行ったような痕跡は、少なくとも確認できた範囲の『今様』誌面からは見えず、流行創出への助言や情報の交換がなされていた程度であったのかもしれない。

なお、震災後の大正14〔1925〕年、松屋が銀座に進出した際に、松屋呉服店顧問会が組織され、塚本靖、笹川臨風、正木直彦、岡田三郎助、久保田米斎ら、三越の流行会などを通じて三越に深く関与していた人物が顧問となった。翌年には、かつての三越のそれと同名の流行研究会が結成されている。顧問会と流行研究会との関係について詳細は不明だが、社史『松屋百年史』（前掲）によれば、これらは展覧会開催や流行図案への助言をその活動として行っていたようだ。

④……………文芸欄の小説群

先に述べたように、明治45〔1912〕年から大正2〔1913〕年の『今様』には、時に「松屋文芸」とも銘打たれた文芸欄が設置され、短歌、俳句、小説、戯曲、随筆などの文学作品が掲載されている。そして、その執筆者は、他の呉服店／百貨店の機関雑誌にも作品を掲載していた者がほとんどだ。まずは、そうした〈文学〉の力学を、松屋の機関雑誌『今様』との関係から捉えておく必要があるだろう。

三越や白木屋の機関雑誌における文学作品がしばしば婚礼や結婚、夫婦生活、家庭生活を描いていたように、⁽²⁶⁾『今様』に掲載された文学作品もそうしたモチーフを多く取り上げている。例えば永島永洲「小春日和」は、婚約者の女性を写真でしか見たことがない男性を、看護婦に扮したその女性が看病し、男性は当の看護婦が自分の結婚相手であったことを後で知ることになるという物語、半井桃水「奇縁」も、日露戦争中に出征兵士に送られた慰問袋が縁で結ばれた男女が、仲人を引き受けた乃木希典の墓の前で結婚式を挙げるとい⁽²⁷⁾う物語だ。

三越や白木屋の機関雑誌に掲載された文学作品と同じように、登場人物の衣服や髪型、装飾品を細かく描く作品も多いが、そうした衣服と人物との関係を主題化したのが饗庭篁村「心の錦」で、郊外を訪れた年配の夫婦が、学校の遠足でその地を訪れた女生徒たちを観察するという内容である。この作品は、観察される人物たちの衣服と、その行動によって推察される内面から、「馬子にも衣裳と云て、成程衣裳付で、男女とも人格を上げるものだが、また自然の人柄といふものは粗末な物でも能く見える、其の人柄は心柄、心の美しいものが自然外面へ現れるものだネ」と、外見と内面の呼応を説こうとしている。

半井桃水「祝賀会」も、祝賀会に着ていく衣服をめぐる女性たちの競争を風刺した物語で、周囲

を出し抜いて一人「大振袖に高島田」で祝賀会に出席する女性を描いている。「他人さまの真似致す事が大の嫌ひ」と語られるこの女性の物語は、差異を無限に演出する流行の性質そのものを表象していると言えよう。この作品や、黒田湖山「滑稽大島紬」のように、登場人物による松屋での商品の購入が描かれることで、結果的に物語そのものが松屋の広告表現となっているような作品があるのも、三越、白木屋の機関雑誌掲載作品と同様である。「滑稽大島紬」は、男性が機嫌の悪い妻との関係を「糸錦の丸帯」を買ってやることで修復し、その話を聞いた情婦から「大島紬」をねだられるという物語だが、やはり衣服や装飾品を男性に買ってもらう女性が描かれている。衣服を買ってもらうことを女性の本質的な喜びとして意味づけるような描き方が見られるのも、三越や白木屋のそれと同様だ。

ただし、「祝賀会」や「滑稽大島紬」に描かれる作中人物の言動を滑稽なそれとして風刺しようとする力学は、作中人物の言動を相対化し、描く対象に対する距離を予め含んでいることと同義であろう。「滑稽大島紬」に描かれるような、買ってやることで女性の機嫌をとる男性、買ってもらうことに喜びを得る女性とは、あまりに単純化された性的属性であり、軽い読み物が多い呉服店／百貨店の機関雑誌においても単なる滑稽な話として提供されるような話型でしかないのである。とするならば、こうした作品に描かれる登場人物の言動や単純化された性的属性に対する〈嗤い〉が生じる可能性もあろうが、こうした点も三越や白木屋のそれに見られるものであり、特筆するような力を持つ表現ではない。衣服を買う、あるいは買ってもらうことをめぐる困難や悲哀を描いた作品が見られるのも同様の傾向で、それは、柳川春葉「宵暗」や井手ゆり子「雪さん」、広津柳浪「羽織のお金」に顕著だ。

柳川春葉「宵暗」には、長屋で暮らす7歳の少女とその祖母、そして少女が「姉さん」と呼ぶ3人の女性が登場する。「姉さん」と呼ばれる女性は茶屋奉公をしており、家にはあまり帰って来ることはないが、帰ってきたときにはしばしば少女への手土産を買ってくる。少女が土産として買ってもらったのは、「他所行の紅い鼻緒の護謨草履」「幅の広いリボン」「菖蒲の染浴衣」などだが、物品の贈与以上に少女に対する「姉さん」の愛情は深い。おそらく、少女が「姉さん」と呼ぶ女性は少女の実母であり、少女は、ある事情から出来たその女性の子であるのだろう。物語は、女性が仕事のためにしばらく遠方に行くことになり、少女に蝙蝠傘を買ってくることを約束して2人に別れを告げるところで幕を閉じている。そうした形で表される少女への愛情は、茶屋奉公という苦労を通じて得た金銭から生まれるものだ。「此子の為なら乞食をしても傍に居たいわね。ああ、何時まで茶屋奉公なんか……」と語る女性のこの買い物は、流行の消費などとは程遠く、少女への切実な思いが込められていると言えよう。

井手ゆり子「雪さん」も、身内の失踪や病のために経済的に困窮している女性「雪さん」の物語である。年の暮れに隣家の「私」がそんな雪さんを心配していると、雪さんは「派手な銘仙が何かの仕立下ろしの羽織を召して、今まで一度も結つた事のない高島田を、思ひ切つて大きく結つて」、白粉をつけた立派な姿で正月を迎えており、翌日の早朝に雪さんの家から「ラッコの毛皮のついたマントを冠つた、四十二三のデブプリとふとつた、脂顔の大きな男」が出ていくことでその理由が明らかになるという筋だ。雪さんは、この男の援助により立派な姿で正月を迎えてはいるが、「寂びしさうな笑顔」でこの状況を受け止めており、男に買ってもらうような情婦のポジションを積極的

に受け入れているわけではない。

広津柳浪「羽織のお金」には、区役所で小使いをしている父親と裁縫で家計を助ける母親、女工として働くその娘が登場する。3人の収入があるために生活に不自由することはないが、娘の収入が家計の中心を占めているという設定だ。娘は正月に着る羽織を買おうと考えるが、家計のことを心配して逡巡していたところに、子を負った若い母親に出くわす。娘は、その母子が、病の父親が待つ秋田へ行く金に困っていることを聞き、羽織を買うための金を譲り渡す。帰宅後、娘はその美談を母親からとがめられもするが、父親が秘かに貯蓄していた金で娘に羽織を買うように勧めるところで物語は閉じられる。物語の結末だけに目を向ければ、父親の秘かな貯蓄が家族を喜びに浸す物語として捉えることも可能かもしれないが、この作品でもやはり正月に着る羽織を買うことに逡巡する女工の内面が描かれており、^{モード}流行の消費が描かれているというには程遠い。女工を主人公に据えるというこの作品の設定も、呉服店／百貨店の機関雑誌に掲載された文学作品としては特異であり、そうした階層は^{モード}流行を創り出す呉服店／百貨店の想定した顧客の階層とはいささかのズレを含んでいたはずである。かつて深刻小説、悲惨小説の書き手として評価されていた柳浪の痕跡をここに見出すことも可能であろう。

『今様』誌上に散見される、買えない階層に焦点を当て、買えないことやその内面を描き出そうとする作品の存在は、三越や白木屋の機関雑誌にも見られるものではあるが、そのことは〈文学〉の力学がそう単純ではないことを示している。機関雑誌の〈文学〉は、商店やその商品を宣伝し、^{モード}流行の消費をあおるというその力学を単純に反映しているわけではないのだ。それは、機関雑誌に寄せられた〈文学〉の多様性によるものでもあろうし、様々な表現の網の目によって構造化されている〈文学〉そのものが一元的に回収されることを拒んでいるからでもあろう。

⑤……………鏡花・雨雀・万太郎

とは言え、『今様』に掲載された作品が言語芸術として優れていると言うことは到底できない。これまでも述べてきたように、それらは機関雑誌という媒体に用意された読み物でしかないし、その媒体は、もとより表現性に意識的である作品などを用意し、期待する場ではないからだ。前述した掲載作品の力学とは、多様に編み込まれた表現の可能性の中から抽出される類のものでしかないのである。ただ、そのような文学作品の中でも、泉鏡花「橋むかふ」、秋田雨雀「浴場の午後」「短き夢」、久保田万太郎「小てるとつる代」は、やや特異な表現性を備えていることは確かだ。これらの作品は、そこに顕在化した表現の方向性が他の『今様』掲載作品に比してやや見えにくいという点において共通している。その〈分かりにくさ〉は、『今様』誌上から想定される読者にとっても、おそらく同様であっただろう。

既に調査されているように、⁽²⁸⁾泉鏡花「橋むかふ」は、『婦女界』[明治44〔1911〕年8月]に掲載された「月夜」という小説の前半部分だけを『今様』に再録したものである。鏡花は三井呉服店時代から三越の機関雑誌にも小説を掲載しているが、「橋むかふ」の成立事情を考えると、『今様』への寄稿にそれほど積極的ではなかったことが見て取れる。この「橋むかふ」の原型である「月夜」は、金沢に帰郷して月夜の晩に町外れを歩く男性の心象風景を描いた作品であり、夜の底を流れる水や

月下の水などの鏡花文学に特徴的なイメージに支えられてはいるが、⁽²⁹⁾プロットが読者を誘導していくような類の小説ではない。ただ、男性の目に映る町外れの風景が、過去の記憶の蘇生や過去への郷愁を交えながら語られていくだけである。特徴的なのは、その風景が鏡花の作品によく見られる怪異な現象に喩えられ、独特な語彙の連なりの中で表現されている点だ。例えば、川辺に飛ぶ蛍の光は、「颯と吹添ふ蛍臭い風に連れて、流れの上へそれたのは、卯の花緋の鎧着た冥界の軍兵が、弗ツと射出す幻の矢が飛ぶやうで、川の半ばで、白く消える」と語られ、梢の梟は、「目も鼻もない、赤剥げのつべらぼうの三尺ばかりの長い顔で、敢て口と云ふも見えぬ癖に、何処かでケタケタと嘲笑ふ」という「赤茶釜」なる妖怪に喩えられている。男性には、その町の家々の廂に掛かっていた秋祭りの提灯も「赤茶釜」と見紛われ、その提灯に「宮のおつかはしめ」と言われる真っ黒な大蜈蚣が蠢くところで小説は閉じられる。

『今様』に掲載された「橋むかふ」は、「月夜」の前半部分だけを取り出しているため、その後半部分に多い怪異的な表現が削除された形で1つの作品として成立しているということになる。つまり「橋むかふ」は、帰郷した男性の追想や郷愁が交えられた風景描写や、川辺に佇んだ男性がそこに漂う蛍を白いハンカチに包んで解き放すという幻想的な記述を中心に据えた小説として掲載されているのである。それは、「月夜」の後半部の怪異表現と、呉服店／百貨店の機関雑誌という媒体との不調和が原因であろうが、そうであるが故に、「橋むかふ」は小説の目的が不明瞭なまま『今様』誌上に漂うことになる。とりわけ、軽い読み物が多く、その目的も明瞭な『今様』誌上の作品の中にこの「橋むかふ」が並べられると、その表現性も手伝って、他作品との大きな差異を誌上に刻み込むことになるのだ。例えば、「橋むかふ」の末尾近くに見られる、「此の樹の蔭から、すらりと向ふへ隈なき白銀の夜に、雪のやうな橋が、瑠璃色の流れの上を、恰も月に投掛けた長き玉章の風情に架る」といった記述がもたらす幻想的な心象風景と、前述したような夫婦、家庭生活を描いた作品群との間には大きな断絶が横たわっていることははっきりと見て取れよう。結果、「月夜」の一部を再録した「橋むかふ」は、いささか不完全で、不明瞭な記述であると同時に、それに伴う幻想性を含み込んだ記述として、『今様』内部に不協和音を発し続けることになるのである。

秋田雨雀の小説「浴場の午後」と戯曲「短き夢」も、そのような意味での差異を孕む作品だ。『今様』にこれらの作を寄せた明治末期から大正初期の雨雀は、小説から戯曲の執筆へと移行していき、小説・戯曲集『幻影と夜曲』[新陽堂、明治44〔1911〕年]や戯曲集『埋れた春』[春陽堂、大正2〔1913〕年]を刊行して劇作家として活動し始めていた。⁽³⁰⁾もともと雨雀は、東京専門学校（雨雀が在学中に早稲田大学に改称）に入学したことをきっかけに島村抱月を知り、抱月の推挙で小説を『早稲田文学』などに掲載していた。島崎藤村とも交流があり、藤村の紹介で小山内薫の『新思潮』の編集を手伝うようになったことから演劇への関心を深め、明治42〔1909〕年11月に創立された自由劇場の会員となった。抱月や藤村との交流や、早稲田大学の学生であったことから、明治40年前後に高まった芸術思潮である自然主義に触れ、その影響を受けていたが、明治末期にはそれから距離を取り始めるようになる。⁽³¹⁾

自然主義の小説から社会性のある戯曲の執筆へと移行した雨雀の文学的経歴と、『今様』に掲載された「浴場の午後」や「短き夢」の記述は、確かに呼応する。「浴場の午後」は、兄である「私」が妹と温泉を訪れ、その地でたまたま邂逅した知人と「私」が共に湯に入ることを語った作品で、

男湯に入った「私」と知人の耳に、隣の女湯で始められた女性の身の上話とそれを聞く妹の声が聞こえることが、浴場の気配を交えながらやや叙情的に語られるところで閉じられている。藤田龍雄『秋田雨雀研究』[津軽書房, 1972年]は、雨雀の小説を「明治四十年代の他の作家の小説に比してかなり劣っている」とあまり評価しておらず、「浴場の午後」も、小説としてそれほど際立った表現を示しているわけではない。『幻影と夜曲』に収められている小説と比較しても、「浴場の午後」の完成度は低いと言わざるを得ない。

ただ、それが『今様』という場に置かれたとき、温泉地での他者との交流をただ綴っただけのこの作品は意味を違えてくる。当時の雨雀の状況から推察すると、呉服店／百貨店の機関雑誌に掲載するのに適当な読み物を、既に関心を失い始めていた自然主義的な技法を借りて用意したということになるのかもしれないが、その点が『今様』では差異を表出することになるのだ。温泉地の情景と心象が自然主義的に描写されているだけのこの作品は、夫婦、家族の関係や消費生活を取り上げた作品が多い『今様』誌上では、その目的の不明瞭な記述として明らかに逸脱しているのである。『今様』に限らず、呉服店／百貨店機関雑誌では文人としての活動実績が重視されるが故に、やや古い世代の書き手の表現ばかりが目立つが、こうした新しい世代の表現が紛れ込んでいることには留意すべきであろう。

もう1つの掲載作品「短き夢」は二幕からなる戯曲で、第一場は、若い夫婦が夫の故郷を訪れ、その宿泊地で夫が故郷に残した別の女性に思いを寄せていることを妻が疑うという内容、第二場は、その夫が見る夢の話が中心で、過去にその地で夫に捨てられたとされる女性が現れ、現在の境遇を話すという内容だ。夢の中で、その女性が、夫に捨てられた後に別の男性と結婚したことや、夫との間に子どもができていたこと、その子どもの目を結婚相手の男性に叩きつぶされたことを夫に訴えているところに当の男性が現れる。獵銃を持ったその男に夫が恐怖を感じ、叫び声を上げたところで夫は目を覚まし、足早に故郷を立ち去るという幕切れである。

松屋の商品を紹介するための媒体である『今様』には、その商品を購入できるだけの経済力を持った読者層が想定されるし、そのための強固な家の基盤が理想として求められていることは言うまでもない。とするならば、一定の経済力を持ち、円満な夫婦、家族関係によって支えられた家こそが、呉服店／百貨店の顧客としては望ましいということになろう。雑誌媒体が求める理想の家庭像に呼応した文学作品がそこに掲載されていることは前述の通りだが、例えば、家長である子爵の男性の浮気を描いた西村渚山（清山）「餅」のように、それを裏切ろうとする作品も存在する。同様に、夫婦の暗部を表象した「短き夢」も、雑誌媒体が求める理想の夫婦像を裏切ろうとする作品として位置づけられよう。

また、「短き夢」に描かれる階層差にも注意すべきだろう。この作品に登場する夫の職業は銀行員であり、夫の故郷を訪れた夫婦は避暑地のホテルに滞在し、妻は「派手な友禅の襦袢」を身に纏えるだけの経済力を持っている。それに対して、夫の故郷での人々の暮らしは田舎じみたものとして描かれ、夫が見る夢の中の女性は貧しく厳しい暮らしを強いられている。「短き夢」に登場する夫婦と松屋が求める顧客が重ね合わせられるとするならば、この作品における第二場、つまり夫の夢とは、一定の経済力を持ち、商品を買えるような階層にあることに対する疑いや脅えのようなものが表象されているということになろう。この夫が見た夢とは、単に過去に捨てた女性に対する罪悪感

を表すだけのものではないのである。そして、このような点に、早くから社会主義に関心を持っていた雨雀の姿を見ることが可能であろう。

『今様』に作品を寄せた頃の秋田雨雀が新人劇作家であったように、『今様』に「小てるとつる代」を掲載した頃の久保田万太郎もまだ慶応義塾大学に在学中の新人作家であった。よく知られているように、万太郎に大きな影響を与えたのは明治43〔1910〕年に慶応に教授として赴任してきた永井荷風であった。その荷風に送った万太郎の小説「朝顔」が『三田文学』〔明治44〔1911〕年6月〕に掲載され、「朝顔」をめぐる小宮豊隆と中村星湖の論争によって万太郎の名が知られるようになったことも評伝などで度々取り上げられている。⁽³²⁾『今様』誌上に「小てるとつる代」が掲載されたのは、明治45〔1912〕年2月に昶山書店から初の小説・戯曲集『浅草』が出版、翌年1月に同じ昶山書店から『雲』が出版された後のことである。

「小てるとつる代」は、青年相場師である横政次郎という作中人物と芸妓との関係を描いた一連の小説の中の一編で、連作は、「お米と十吉」〔『新小説』明治45〔1912〕年1月〕、「なりゆき」〔同 同年8月〕、「小てるとつる代」〔『今様』大正2〔1913〕年5月〕、「わかるるとき」〔『新小説』同年9月〕、「ひと幕」〔『処女』同年11月〕と続いている。この連作は、概して横とはつ子、小てるといふ芸妓との関係を描いたもので、「小てるとつる代」は、既に前作「なりゆき」の中に登場していた小てると仲の良いつる代という芸妓が、この連作の中に登場することになった理由を語った小説である。「小てるとつる代」の中では、横がつる代を知ることになったきっかけや、小てるとつる代の親密な様子が語られているが、この一編だけを読んでも作品の意味はつかめない。それまでの万太郎の作品を全て読んでいた読者ならともかく、それが松屋の機関雑誌『今様』という特殊な媒体に掲載されたことや、連作の中の一編であること、その中に1人の作中人物が登場する由来を語った小説であることが重なり合って、作品の目的が見えにくい状態に置かれているのである。それを懸念してか、『今様』掲載時には以下のように小説が語り始められている。

実はこの話も、Sがまだ兜町の店にゐた時分の話なんで、今までに私がいろいろお話した事に、やつぱり関係のある事なんでご座います。——ですからまア、何卒これは何んか或る長い話の挿話かなんかだと思つて、そのおつもりで聴いて頂きたいんで、——その方が、勝手な事も勝手なんでご座います。

引用部にあるように、語り手は、「今までに私がいろいろお話した事に、やつぱり関係のある事」であることを話の聞き手に断り、「これは何んか或る長い話の挿話かなんかだと思つて、そのおつもりで聴いて頂きたい」と説明するが、それでも「この話」を理解するためには「今までに私がいろいろお話した事」を知っていることが前提となる。そのような意味で、この冒頭は、「今までに私がいろいろお話した事」への関心を聞き手に喚起する作用も伴っているのであろう。この「小てるとつる代」は、後に「つる代」と改題され、大正3〔1914〕年4月に春陽堂から刊行された『わかるるとき』に収録されたが、その際には、引用部にある「S」というイニシャルは「横」に改められ、引用部は削除されている。引用部には、松屋の機関雑誌『今様』の読者への配慮が表れていたことは確かだ。

とは言え、この作品も泉鏡花の「橋むかふ」同様、前に述べたような理由から『今様』の読者には不明瞭な記述として誌上を浮遊することになろう。ただ、花柳界を舞台としたこの小説の掲載、

ひいては東京下町の風俗を描き続けた江戸っ子万太郎の起用は、江戸文化を再創造して流行を形成しようとする呉服店／百貨店の機関雑誌に呼応してはいる。永井荷風に師事していた万太郎は、存在しない〈江戸〉をロマンティズムの対象としていたパンの会の芸術家たちの延長線上にあるからだ。⁽³⁴⁾この呼応は、『今様』編集部が企図したものであるというよりも、『今様』をめぐる人的ネットワークが呼び込んだ偶然によるところが大きいように推測される。

前述したように、作家としての業績を蓄積したやや古い世代の書き手が多い呉服店／百貨店の機関雑誌に、雨雀や万太郎のような当時の新人作家が作品を寄せていることは特異な例であるが、パンの会に集った芸術家たちが共有していたような〈江戸趣味〉の延長上にある万太郎はまだしも、社会主義に関心を示し、既に作品にもその兆候が表れていた雨雀と、松屋の『今様』を結びつけたものは明確ではない。ただ、現在確認できる松屋や『今様』をめぐる情報から考えると、松屋と万太郎、雨雀を結び付けていく人的ネットワークは確かに存在する。

例えば、明治45〔1912〕年に結成された今様会の会員の1人に伊原青々園の名が見られるが、当時の青々園は都新聞の記者として主に劇評を執筆する傍ら、創作や演劇史の研究に取り組んでいた。そのようなポジションから演劇関係者との接点は多く、後に自由劇場を結成することになる小山内薫とも小山内が学生の頃から通じている。⁽³⁵⁾前述したように、雨雀は、小山内の『新思潮』の編集を手伝い、共にイブセン会を結成する関係にあると共に、自由劇場創立時の会員でもあり、その関係は深い。⁽³⁶⁾一方、万太郎も慶応義塾で教鞭を執っていた小山内の講義を傍聴しているし、万太郎が千野菊次郎名で応募した懸賞当選作「Prologue」〔『太陽』明治44〔1911〕年7月1日〕の選者が小山内であったことや、明治45〔1912〕年4月に万太郎の「暮れがた」が上演された際の舞台監督も小山内であったことなどから2人は師弟関係にあると言ってよい。⁽³⁷⁾つまり、今様会の会員である青々園と、雨雀、万太郎という2人の新人作家は、小山内薫を媒介にすることで繋がっていくのである。あるいは、劇評家である青々園が、雨雀や万太郎の作品の上演を直接目にしたことも十分に考えられる。このような演劇界の人的ネットワークが、『今様』と雨雀、万太郎を結びつけた可能性はあるだろう。

その詳細は不明だが、いずれにせよ、2人の新人作家の作品が『今様』という呉服店／百貨店の機関雑誌に掲載されていることが特異であることは確かだ。その作品はやはり言語芸術としてそれほど完成度の高いものではないかもしれないが、それらが『今様』に配置されたとき、呉服店／百貨店の機関雑誌そのものが孕む力学に回収されないような表現性を発揮することになる。他の掲載作品とはやや方向性を違えていたり、聊か不明瞭であったりする、そうした〈文学〉の微細な表現は、やはり雨雀や万太郎の作品に顕著なのである。『今様』の文芸欄は、三越や白木屋の機関雑誌における文芸関連記事の充実度にははるかに及ばないが、この2人の寄稿とその表現性にこそ三越や白木屋のそれとは異なった意義を見出せよう。

おわりに

いわゆる文学史においては記述されることはないが、パンの会に集った芸術家たちが異国情緒を喚起するロマンティックな対象として〈江戸〉を志向していた明治末期から大正初期は、三越の元

禄研究会や流行会、江戸趣味研究会が生まれ、『趣味研究 大江戸』を刊行した江戸研究会なるものの動向があった時期でもある。江戸趣味研究会や江戸研究会に集った人物たちはやや古い世代の者が多く、江戸文化を価値あるものとして研究するような保守的な立場にあるが、パンの会に集った若い芸術家たちの〈江戸〉に対するロマンティシズムは、言わば当時の前衛芸術思潮であった。同時期に生じたこの〈江戸〉に対するまなざしには、確かに世代間の差の問題やそれに伴った認識の違いがあろうが、そこに底流しているのは2度の対外戦争による社会システムそのものの変容と、〈江戸〉に対する時間、空間的な隔たりであろう。そうした中で三越は元禄模様という流行を形成し、それを消費の対象とすることを促したのである。三越が江戸趣味研究会の会員たちに代表されるような文人、知識人と結びついたのは、それぞれの分野で実績を蓄積していた彼らの価値を担保としたからに他ならない。そのような意味で、三越の作った流行とは保守的な傾向が強いものである。

もちろん、本稿で扱ってきた松屋もそうした動きと無縁ではない。現在確認できる中で最も古い『今様』『秋の巻』[明治39〔1906〕年9月]の序文には、「元禄模様は新意匠に想化せられんとして成らず、其根源なる桃山模様もまた時勢に投合せずして行けり、抑々江戸時代の鎔冶に成りたる優雅閑麗の風俗を冥想せば元禄のそれにも優れる時代あり、店員等志を此に存し、綾錦繡の断片に至るまで此処に彼処に摘集めて、之を考證家に問ひ、而して其美と粹とを当世風に移して、出し列ねたれば、陳列場は宛然花卉幽草の華を観る如し」とあり、元禄模様や桃山模様の流行を生んだ三越に対する対抗意識を持ちながらも、やはり〈江戸〉に遡及することで流行を形成しようとする松屋の姿がうかがえる。

三越や松屋に限らず、当時の呉服店／百貨店は、一様に流行の形成に過去の意匠を再利用しようとするが、そこに〈文学〉が動員される場合には、得てして既にその価値や評価が定まったものが動員されていく。評価の確定している文人、知識人たちの記述は、呉服店／百貨店の商業的な価値を補強していくものであるからだ。実績ある者たちの記述は、その記述がどうであれ、その商店の伝統と権威の中に回収されていくのである。とするならば、『今様』に掲載された秋田雨雀、久保田万太郎という2人の新人作家の作品は、単に『今様』の内部において差異を表出しているのみならず、呉服店／百貨店と〈文学〉との関係そのものに対する不協和音でもあるだろう。日露戦争後における黎明期の消費社会システムは、〈歴史〉を表象のそれに代え、消費の対象に代えていくが、『今様』誌上の雨雀、万太郎の表現は、そうした運動と結びつくような〈文学〉に対する差異としてそこにあるのだ。現段階では『今様』全冊を確認できてはいないが、少なくとも確認できた範囲においては、そのような特徴と意義が見出せるのである。

[付記]

『今様』の調査にあたっては、株式会社松屋総務部広報課の名倉麻紀氏にご協力いただいた。記してお礼申し上げたい。

註

- (1)——土屋礼子「百貨店発行の機関雑誌」,「百貨店発行の逐次刊行物リスト」(山本武利・西沢保編『百貨店の文化史—日本の消費革命』世界思想社,1999年)参照。
- (2)——このパラグラフについては、『松屋百年史』(株式会社松屋,1969年)を参照した。
- (3)——土屋礼子「百貨店発行の機関雑誌」,「百貨店発行の逐次刊行物リスト」(前掲)参照。
- (4)——太田賛雄「序」(永島今四郎・太田賛雄『千代田城大奥 上』(朝野新聞社,明治25〔1892〕年)参照。
- (5)——宮武外骨・西田長寿『明治大正言論資料20 明治新聞雑誌関係者略伝』(みすず書房,1985年)参照。なお、永洲は新聞記者の傍ら子ども向けの読物も多く執筆した。詳しくは、上田信道「永島永洲の児童文学—冒険・探偵小説を中心に—」(『国際児童文学館紀要』1994年3月)を参照されたい。ちなみに永洲は、明治44〔1911〕年8月から三越の流行会に参加するようになる。
- (6)——旧幕臣としての戸川残花の姿は、岩淵令治「『江戸史蹟』の誕生—旧幕臣戸川残花の軌跡から—」(『文人世界の光芒と古都奈良—大和の生き字引・水木要太郎—』思文閣出版,2009年)に詳しい。
- (7)——神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテキスト』(勁草書房,1994年)参照。
- (8)——白木屋の場合、三越の流行会のような組織が結成された痕跡は、少なくともその機関雑誌からは見えない。しかし、白木屋の『流行』(明治41〔1908〕年5月)には、戸川残花が意匠顧問に就任したことが伝えられており、やはり同様の傾向が見られる。
- (9)——宮武外骨・西田長寿『明治大正言論資料20 明治新聞雑誌関係者略伝』(前掲)、樋口二葉『日本書誌学大系35 浮世絵と板画の研究』(青裳堂書店,1983年)参照。
- (10)——「逝ける人々」(東京堂年鑑編輯部編『出版年鑑 昭和六年版』東京堂,昭和6〔1931〕年)参照。
- (11)——二見和彦「『社会万般番附大集』と近藤蕉雨のこと」(『日本古書通信』1991年8月),Y「番付作家・近藤蕉雨」(同,2009年6月)参照。
- (12)——高島平三郎の講演「流行の原理」は明治43〔1910〕年7月発行の『みつこしタイムス』に、「趣味の心理」は同年12月発行の『みつこしタイムス』に掲載されている。
- (13)——学問の対象として流行(モード)を分析した言説については、拙著『流行と虚栄の生成 消費文化を映す日本近代文学』(世界思想社,2008年)を参照のこと。
- (14)——拙著『流行と虚栄の生成 消費文化を映す日本近代文学』(前掲)参照。
- (15)——浜田四郎『百貨店一夕話』(日本電報通信社,1948年)参照。
- (16)——『松屋百年史』(前掲)参照。
- (17)——松崎天民については、後藤正人『松崎天民の半生涯と探訪記 友愛と正義の社会部記者』(和泉書院,2006年)、坪内祐三『探訪記者松崎天民』(筑摩書房,2011年)などの研究がある。
- (18)——松原至文は本名を致遠というが、松原致遠は、今様会会員であった明治45〔1912〕年当時、報知新聞紙上に連載された記事をまとめ、新潮社から『大久保利通』という書物を刊行している。同年6月22日の『東京朝日新聞』第1面に掲載されたその出版広告から、至文松原致遠が報知新聞記者を務めていたことが確認できる。
- (19)——『新聞人名辞典』(全3巻 日本図書センター,1988年)参照。ちなみに『新聞人名辞典』の第1巻,第2巻は、永代静雄が編集していた『新聞及新聞記者』(大正10〔1921〕年10月,及び大正11〔1922〕年6月)の「日本記者年鑑」,『日本新聞年鑑』(新聞研究所,大正13〔1924〕～昭和5〔1930〕年),『昭和新聞名家録』(新聞研究所,昭和5〔1930〕年)を底本としているが、永代は、田山花袋「蒲団」(『新小説』明治40〔1907〕年9月)の作中人物田中のモデルとして知られる。
- (20)——稲村徹元・井門寛・丸山信編『大正過去帳〈物故人名辞典〉』(東京美術,1973年)によると、帝国通信社の細井直次が大正4〔1915〕年に40歳で死去したときの役職は常務取締役であったという。電通100年史編集委員会『電通一〇〇年史 資料編』(株式会社電通,2001年)によれば、電報通信社の光永真三は、初代社長光永星郎の実弟に当たり、真三は大正7〔1918〕年に営業部長に就任後、取締役、常務、専務、二代社長と昇進の道を歩む。弘報堂の河村偵(貞?)は、大正期に弘報堂に住み込み給仕として勤務していた瀬田兼丸『遠ざかる大正 私の銀座』(新泉社,1986年)の回想によると、代表的外務員として社の内外で重用されていたという。正路喜社の浅田源一は、『新聞人名辞典』(前掲)によると、大正元〔1912〕年に出資社員、後に無限責任社員から取締役となる。前掲した瀬田兼丸『遠ざかる大正 私の銀座』には、こうした当時の広告代理業者や、各新聞社関係者の名が頻出する。
- (21)——『新聞人名辞典』(前掲)参照。
- (22)——山上鶯郎『英国工場法百年史』(大日本労働協会出版部,明治43〔1910〕年)参照。
- (23)——隈部紫明・山下博『福博の人物 第一輯』(福岡出版協会,昭和10〔1935〕年)参照。

(24)——『新聞人名辞典』(前掲)参照。同書には、自由通信社の理事やろせったホテル専務取締役を経て、大正2〔1913〕年に中央新聞社に入社したと記してあるが、詳細は不明。瀬田兼丸『遠ざかる大正 私の銀座』(前掲)には森が大正期に中央新聞の営業局長を務めていたとある。

(25)——尾間明「稿料返却」(蘆花会編『徳富蘆花 検討と追想』岩波書店、昭和11〔1936〕年),『新聞人名辞典』(前掲)参照。

(26)——拙著『流行と虚栄の生成 消費文化を映す日本近代文学』(前掲)参照。

(27)——半井桃水は、日露戦争中に乃木希典の軍の従軍記者を務めていた。また、『東京朝日新聞』(明治39〔1906〕年1～4月)に小説「慰問袋」を連載しており、草薙聡志「半井桃水 小説貴社の時代19 従軍から帰ると「浦島太郎」」(『朝日総研レポート AIR21』2006年10月)は、この小説について、「戦場にある美男と銃後の美女が、数奇な運命に翻弄されながら幸せな再会を果たす、おなじみの桃水流だ」と述べている。「奇縁」のモチーフも同様であると言えよう。

(28)——田中励儀「著作目録」(『新編泉鏡花集 別巻二』岩波書店、2006年)参照。

(29)——松村友視「「水月」への意志 泉鏡花の描く夜」(『日本の美学』1995年11月)参照。

(30)——藤田龍雄『秋田雨雀研究』(津軽書房、1972年)参照。

(31)——藤田龍雄『秋田雨雀研究』(前掲)参照。

(32)——戸板康二『久保田万太郎』(文藝春秋、1967年)、後藤杜三『わが久保田万太郎』(青蛙房、1973年)等参照。

(33)——柳澤孝子「久保田万太郎の出発点—胡蝶本『浅草』を中心に—」(『国文学研究』(早稲田大学国文学会)1980年10月)、石割透「久保田万太郎 (一)」(『駒沢短大国文』1984年3月)参照。

(34)——野田宇太郎『日本耽美派文学の誕生』(河出書房新社、1975年)参照。

(35)——岡田八千代『若き日の小山内薫』(古今書院、昭和15〔1940〕年)参照。

(36)——藤田龍雄『秋田雨雀研究』(前掲)参照。

(37)——戸板康二『久保田万太郎』(前掲)参照。

(広島大学大学院文学研究科、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2014年12月1日受付、2015年1月26日審査終了)

Creation of Fashion Trends and Literature: Literary Columns in *Imayou* issued by Matsuya Gofukuten

SEZAKI Keiji

In the Meiji 30s (1897–1906), kimono fabrics stores launched their booklets while developing into department stores. The booklets of kimono fabric / department stores served not only as a medium to introduce their products and create modern fashion trends but also as a literary magazine to offer many articles to read. This was particularly prominent in the booklets published by Mitsukoshi and Shirokiya. Another similar example was *Imayou*, issued by Matsuya Gofukuten for the first time in 1906. It is presumed, from the information available at present, that *Imayou* published from 1912 to 1913 often contained literary columns. These columns, as well as the booklets of Mitsukoshi and Shirokiya, were mainly written by scholars with a profound knowledge of Edo culture, literary authors of older generations, and intellectuals of the times. It is also found that a society called “*Imayou-kai*” was established in 1912, consisting of newspaper journalists and advertising agents. *Imayou* published many literary works similar to those in the booklets of Mitsukoshi and Shirokiya. They mainly depicted consumption activities in the daily lives of newly-weds, families, and couples. *Imayou*, however, also offered some unique works, such as Hashi Mukou (*Over the Bridge*) by Kyōka Izumi, *Yokujō-no-Gogo* (*The Afternoon of the Bathhouse*) and *Mijikaki Yume* (*A Short Dream*) by Ujaku Akita, and *Koteru-to-Tsuruyo* (*Koteru and Tsuruyo*) by Mantarō Kubota. Compared with other novels in *Imayou*, their objectives were unclear, which was reflected in their unique expressions. In addition, it is worth noting that newly emerging writers such as Ujaku and Mantarō contributed their works to *Imayou* since most literary works in the booklets of kimono fabric / department stores were written by authors of older generations. This makes *Imayou* an important magazine to analyze.

Key words: Edo taste, Kyōka Izumi, Ujaku Akita, Mantarō Kubota